

3) 法動態部門(部門責任者)

桑原朝子（教授・日本法制史）

2023 年度の研究活動およびそのアウトプットについて。

今年度の個人の研究活動の中心となったのは、科研費基盤研究(C)「近世日本における隔地間取引・為替制度の発達と信用をめぐる意識構造」もその一部をなす、近世日本の信用に関する研究である。

具体的には、近松門左衛門『冥途の飛脚』のテキストを関連史料と比較しつつ見直し、近松が現実とも同じ題材の他の文芸とも異なる描き方をしている部分に着目することで、現実のいかなる点に問題を感じていたかを明確にすることを試みた。その結果、飛脚問屋仲間の間の結束と統制の強さを強調する点や、放蕩息子である主人公の友人のやや屈折した描き方に、近松の特徴があることが確認できた。放蕩息子の友人や従者は西洋喜劇においては極めて重要な役割を果たすが、『冥途の飛脚』に限らず近松の世話物においては、放蕩息子と恋仲の遊女、息子の父親など、西洋喜劇と似た登場人物と設定が見られるものの、放蕩息子と強く連帯する友人や従者は現れず、結末は悲劇的である。放蕩息子と友人の連帯が働かない点は、近世の町人社会において、権力や土地の関係から距離をとった自律的な商業信用が希求されながらもなかなか上手くいかないことや、日本史上喜劇の伝統が極めて弱いことも深く関わっていると考えられる。この点に関しては、今年度末にセンター主催で開催した木庭頭氏の講演会「ローマ喜劇に見る市民社会のエートス形成——プラウトゥス『捕虜』の一解釈」も考察の参考になった。但し、『冥途の飛脚』に関する論考については、まだ検討を加えたい点もあり、活字化は来年度以降になる予定である。よって、今年度公表に至ったのは、近松門左衛門の別の作品である『博多小女郎波枕』を題材としてルールの破り方について考察した旧稿に最低限の修正を加えた下記の共著論文のみである。

なお、近世日本の信用に関する研究と並行して、数年来継続している近代移行期に関する信用の研究も若干進めることができた。2022 年に樋口一葉の『大つごもり』のテキスト分析により、無尽講などの相互扶助的な信用の基盤となっていた、地縁や血縁による共同体やそれを支える連帯意識が、明治前期から中期の大都市において弱体化していることを明らかにしたが、今年度は、『大つごもり』のテキストの背景にあった、樋口家の経済的浮沈について、より長いスパンで詳細に検討した。その結果、一葉の祖父の時代以降、樋口家の信用の基盤が学問・文芸と地縁的・血縁的共同体(特に甲州出身者のネットワーク)にあったことと、その双方の時代による変化が明らかになった。この内容は、来年度に共著中の一論文として公表する予定である。

その他(教育活動ほか)

前期は、全学教育の「歴史の視座:文学にみる近代日本社会の問題」、法学部専門科目の「演習Ⅱ」、法科大学院と研究大学院の合併科目の「日本法史」を担当した。後期は、法学部専門科目の「法史学Ⅰ」と「演習Ⅰ」を担当したほか、留学生向けのオムニバス講義「日本法入門」のうちの3回分と、全学教育のオムニバス講義「人間と文化:価値対立時代の対話学」のうちの2回分を担当した。

論文

論文標題	誌名	発行年	頁
「国法」が破られる意味——近松門左衛門『博多小女郎波枕』の分析を手掛りとして	リーガル・ラディカリズム——法の限界を根源から問う	2023 年	33-46